

前回(4月号)まで望月小太郎著『Japan To-day(現時の日本)』(1910年)についてその装丁や概要を見てきたが、今回からこの書物の天理教に関する記述を見ていくことにする。天理教は、第4章の「寺院と神社」のなかで神道の一派として紹介されている。「寺院と神社」は全部で17頁あり、そのなかで高野山金剛峰寺や江ノ島神社など合計10の宗派や教派が紹介されているが、天理教の説明は3頁にわたり、ほかと比べて詳細に紹介されていると言える。

望月はまず宇宙の起源、自然現象の摂理、そして人間の運命について言及し、優れた哲学者たちの深い洞察や古代から書き記されてきた書物などによって、これまで我々人間がどこまで真にこれらの事柄を理解できたのだろうかと問いかけている。そして、懐疑論者にはあらゆるものが不可知に見えるかもしれないが、信仰の目を開き、敬意と敬虔な態度をもって天と地を観察することで、その広大さと無限性に驚かされるのであり、そのような認識において天国は意義深いものとなり、人間世界は意味に満ち溢れたものとなると続ける。

そして望月は、キリスト、孔子、ブッダ、ソクラテスの名前を挙げ、こういった悟りを開いた人々は、その言動をもって人間の生き方を説明することで、人々の無知の魂を啓発し、人類と世界の救済を目指してきたのだとして次のように述べている。彼らは、人間でありながらも神でもあり、人類が歩むべき道を示すためにこの世に生まれたのである。懐疑的な不安、学問的推論、道理に合わない詭弁を持たず、宇宙の神秘の深淵に飛び込み、偉大な真理に関する先見の概念を享受し、無数の魂を正しい道へと導くことが出来る人々である。世の中の人々は彼らの話に耳を傾けることで、心を入れ替え、行いを改めるのであり、心の安寧と自らの運命への悟りを得ることが出来るのである。これら悟りを開いた者たちは、神、ブッダ、聖人、賢者などと呼ばれ、人々から大いなる尊敬を集めている。そして望月は、このように世界には神の啓示や長年の思索によって新たな教えを創始する人々がいるのであり、天理教の教祖もその一人である、と述べる。

望月はまず天理教について、その最大の特徴はその教義にあるのではなく、忠誠心、従順な心、信仰心などの涵養、そして信心深さと愛国心という美德にあるのだ、と述べる。そして、その主張を裏付けるものとして次のようなエピソードを紹介している。1887年(明治20)の夏の終わり、大阪のある著名な小説家が美濃国恵那(現在の岐阜県恵那市)を訪れていた。道中には越えなければならない多くの山谷があった。灼熱の太陽のもと険しい道を歩き続け、たくさんの本が詰まったかばんが肩に重くのしかかっていた。このような旅に不慣れな小説家は疲れ果て、道端にへたり込んでしまった。ちょうどその時、40歳ぐらいの穏やかで物静かな風貌の農夫が通りかかり、彼のかばんを持つことを申し出た。彼は大変喜び、農夫の後についていくことになったが、その姿はまるで天の光明に包まれているように見えたのである。小説家はこの農夫と別れる際に、御礼として20銭銀貨を渡そうとしたが、その農夫は受け取ろうとせず、「私は天理教の信者であり、神のためにあなたに奉仕し

たのですから、あなたの申し出は受け入れられませんし、受け入れる理由も見つかりません」と言ったのである。望月は、このエピソードを紹介したのち、この天理教信者は単なる無知な農夫に過ぎなかったが、彼は天理教の教えを聞き、利他的で自己犠牲的、そして同情心のある人間になったのであり、この一例はいかに天理教がその教えの実践を重視しているかを示している、と説明しているのである。

続いて、望月は天理教の教義について説明していくが、まず人間の魂について言及している。天理教によれば、人間の魂は神から授かったもので、それは無限で、不滅で、その営みには終わりが無い。そして魂が磨かれ、洗練され、いかなる異物も混じっていないほど純粋になると、人は神と接することができ、神の意志と結びつくことができる。この悟りの境地に達した者は、今度は喜んでその言動により他者をこの教えに導くようになるのであるとしている。

次に、望月は教祖について述べる。天理教の教祖は幼いころから非常に敬虔で信心深く、自然の神秘に深く入り込んで、天理の教えの受容者となった。神が彼女に神とこの世の真理を啓示し、この啓示によって彼女は数十年にわたり布教活動を推進することとなり、やがてこの宗教団体が設立されたのである。天理教の信者は、教祖の戒律は天の道にかなう神聖なものであり、人々に心の安寧と生きる目的を与えるものであると信じている。そのため、彼らはこの宗教の教義を遵守し、その恩寵に感謝を捧げているのである。そして望月は、天理教の教えによれば、人間は神の恩寵によってこの世に存在しているのであり、人間の身体、この世界、そしてありとあらゆるものは神に属するものであると続ける。人間は、神の恩寵によって、これらを借り受けているにすぎない。しかし、人間はこの偉大でありかつ明白な事実気づくことができず、すべては自分たちのものであるという誤った考えで生きてきたのである。利己的な動機と欲情によって引き起こされるすべての盲目的な争いはこの知識の欠如の結果であると天理教は教えている、と説明している。

さらに望月は、天理教の説く天の法則について次のように説明する。神の所有物であり、人間が神から借りているこの世界は、道徳的な目的のもと神によって統治されている。この神の世界には、偶然に生じてくる出来事は一つもない。蒔かれた種は必ず生えるのである。貧しい人、裕福な人、賢い人、愚かな人、高貴な人、卑しい人、健康な人、病気の人、皆それぞれに原因がある。病気や貧困のなかで自らの運命を嘆き悲しむ人は、この世の道理を知らず、それに基づいて生きていないのである。天の法則を理解し、それに従えば、病人や貧しい人でも自分の運命について嘆き悲しむことはない。すべては神の恵みによるのである。そしてこの神の恵みに浴するためには、神の意志に基づき、奉仕しなければならない。これが天理教の教える「ひのきしん」である。これは神への無償の奉仕である。天理教の信者たちは、この「ひのきしん」の生き方を目指し、その実践に努力している。この境地に達すると、知識や身分、貧富は問題ではなくなり、神の意志に近づいて、皆が平等に祝福を受けることが出来るのである。